

雑感～それぞれの思い～

遙かなる道

本多裕美子

シルクロードに憧れ、タクラマカン砂漠を夢見た。準備に追われても、合宿で体力の差に不安をおぼえることも度々あったけれど、たくさんの人に支えられ、助けられながらいつも心の中で“タクラマカン砂漠”を呪文のように唱えていた。

なぜシルクロードに憧れ、こんなにタクラマカン砂漠にひかれたのかは自分でもよくわからない。けれど小学校2年生に正倉院展で見た、はるか海の向こうからやって来たという“モノ”たちの強烈な印象は今でもはっきりと覚えている。その“モノ”たちはキャラバンの駱駝に揺られ、砂漠を見たのかもしれない。そして遙か昔にこんなに変わったものを使っていたのは一体どんな人なのだろう・・・と。

あれからどれくらいの年月を経たのか。砂漠周辺のオアシスで暮らす人々の存在、年々徐々に移動する砂に飲みこまれるのではないかと脅かされて生活をしている村の人々の存在。そんな砂漠化に対して緑化に取り組む人々の存在。厳しい自然環境のもとで暮らす人々や力強く闘っている人々がいることを知った。そしてそんなタクラマカン砂漠に挑んでみたいと思った。時は折しも1995年。スウェーデンの探検家スウェン・ヘディンがタクラマカン砂漠に入り、失敗してからちょうど100年目にあたる計画だった。

私たちの出発は気候が穏やかになると聞いていた9月の下旬。しかし砂漠は灼熱の太陽と共に迎えてくれた。信じられない砂漠での雨やそれとともにぐんぐんと下がっていく気温。そして何より驚いた石油開発。約一ヵ月の短い行程ではあったけれど、自分の目でタクラマカン砂漠の“今”を確かめ、その厳しい自然を体験することができた。そんな中でも踏むとさらさらと崩れてゆく砂や風紋、真っ青な大空、太陽、月、星。時には厳しく、時には心地好く吹く風。これだけは今も昔も変わっていないのだろう。そしてこれからも。

自然の力は偉大である。砂漠の中で石油開発に携わる人々の一方で、すぐそばにまで砂丘が迫っている村もあった。しかし、出会った人々は明るく元気で村は活気に満ちている。子供たちは純粹で好奇心に溢れていた。確かに厳しい自然環境の中ではあるが、砂漠から出てきた私の目にオアシスの村は豊かに映った。偉大な力を持つ自然と人間の生活。まさにその共生を見たような気がする。忘れられない人々の暖かさ、澄んだ瞳を求めてまたいつか彼らのもとへ訪れたい。



ラクダと遊ぶ(本多)

自己内部における今遠征の位置づけ

香川史朗

私はごく普通の青年であった。少なくとも大学一回生までは。結構真面目に授業に出て、終わればバイトに遊び。その繰り返し。それはそれで楽しい日々であったが、夏を過ぎ秋を迎えるようになると、何か自分の中にいまいち物足りないものを感じるようになっていた。

「よう考えたら俺ってなんにも大学と関わってへんな。」「俺という人間が関西大学にいたということすら誰にも知られずに終わってしまうんちゃうやろか?」「そんなんやっばり虚しいわ。」「そうや。やっばり何か本気で取り組んでいるクラブに入ったろっ。」

こうして友達からクラブ紹介のパンフを借りて見ていたところに衝撃的な勢いで飛び込んできた“探検部”という文字。“探検”という文字を見て思い浮かぶことといたら、当時は“川口探検隊”“徳川埋蔵金”etc・・・で、そんなクラブなんか遊び半分ない加減なイカれたクラブだという疑いの念の方が強くガイダンスを受けに行くのに不安を抱いたことを今でも覚えている。もちろん、ガイダンスを受けに行って一発でこのクラブが、命を賭けた、真剣なクラブであることを知り魅了されたわけなのだが・・・

入部してすぐに、小・中と同じだった野口隊長と偶然に再会し、今遠征に誘われ、一気に入隊し、あっと言う間に行き帰ってきたという感じである。その間、いろんな今まで私の知らなかった世界や人々に出会い、刺激を受け、また他隊員と切磋琢磨もってひたすら一直線に突っ走ってきた。

これからの人生を考える上で、この2年間に会った2つの大きなもの、つまり、“関西大学探検部”と“タクラマカン砂漠踏破遠征隊”は大きな指針を与えてくれた。“関西大学探検部”は「協調性の重要さ」と「友情の素晴らしさ」を、“タクラマカン砂漠踏破遠征隊”は「自分に秘められた大なる可能性の認識」と「人間やろうと思えば何だってできるという自身」を与えてくれた。私は、これから就職をしばらくせず今一度さらなる大きな夢をこの“関西大学探検部”で知り合った永遠の友と共に、“タクラマカン遠征”で得た経験と勇気を振り絞って必ずや実現してやろうと意気込んでいる次第だ。

ただ、今はまだ両親の了解を得るべく、説得する勇気がなく、困っている。



パミールに佇む（香川）

歩いてゆく人間

田口学

この遠征計画も報告書が出来上がったら、いよいよ全ての取り組みが終わる。1回生の冬から始まり、今ではもう3回生を終え、普通なら早くも就職活動を始める時期になっている。終わってみると何て早いものなんだ。

タクラマカンを目ざした日々は、長いような、短いような不思議な時間感覚で進んだ面白い日々だった。素直に「やって良かった」とつくづく思えるから、僕にとっては成功だったに違いない。この「やって良かった」は、「終わったよ、お疲れ様」という心から出ているんじゃない。「世界は広い、いろんな人がいる、凄いぞ。まだまだ俺はやるぞ」という気からでたもの。タクラマカンの夢を見た日々が、更にこれからの日々を大きく大きく膨らませてくれた。これは大成功だ。

僕は評論家ではない。僕らのタクラマカン遠征が、“探検”の中でどういう風に意義付けられるのかは知らない。そんなことより、僕は歩いた人間であることを誇りに思う。いろんな本や記事、映像に巡り会って感動することはとても多くて、それは素晴らしいことだけど、やっぱり自分で歩きながらもの思うことが大切だと思う。砂漠を歩いたことだけじゃない。長くもあり苦しくもあり楽しくもあった準備期間の道のりも歩いてこれて良かった。側から見て感動するのではなく、自分で歩いて感じることはとても大きいように思う。これからも僕は、やっぱり歩いていく人間でありたいと思う。

歩きたいけど、踏み出せない人はたくさんいるのかもしれない。甲子園を目指した高校時代などとは違っ

て、いまいち屋飛雄馬の如く瞳を燃やすものがなかった1回生の時、僕は見る人だったように思う。“見る人から歩く人にならんと一歩踏み出した時”というとなんかロマンチックだが、その時は別にそんなオーバーなものではなかった。僕が特に考えない人間なのかもしれないが、“とりあえず、いっちゃったろかー”という具合にぼんと飛び出した。探検部において、歩いた人または今歩いている人に出会ったことが大きかったのだろう。関大探検部はそういう所だ。今は見ている人だが、歩いてゆきたいと思っている人にメッセージを送れる人間でありたい。

もう既にタクラマカンに続くチャレンジの取り組みは始まっている。タクラマカンのいろんな失敗や成功を糧にして、歩いていこう。どんなことでも乗り越えて行けると思う。

応援してくださった方々、松原さんはじめOB諸兄や家族に心から感謝しています。これからも期待しててください。

1996. 2. 7.



子供たちと(田口)

これから

野口伸也

僕は「学生の中の思い出作り」とか「学生の中にやりたいことをやる」とかいった考え方が嫌いだ。まるで、学生の中にすることは遊びだけで、卒業したらハイそれまで、シッカリ現実を見据えて働きましょうっていう考えは、なんだか嫌だ。学生をバカにするなって言いたい。

将来、中央アジアをフィールドに、なんらかの活動を続けて、それで飯を食べていきたいという、ムシのいい夢が僕の小さな野望だ。それ以外は死んでも嫌だ。高校の頃からそう思っていた。けれども僕は何もしなかったし、する気にもならなかった。できるとも思わなかった。それでいつも鬱屈とした暗い怒りが心を占領していた。

けれど、探検部に入って、先輩達を見ていると、なんだか勇気つけられてきた。何のステップも地位も、本当に何も無い、僕と等身大の学生が、頑張っってやりたいことを実現していこうとしている。そんな姿に何かを感じた。だから、その時、夢の為に出来ることを考えた。憧れの地、タクラマカン砂漠に行って何かしたい。そんな漠然とした、しかし激しい情熱を、こういった遠征のかたちにした。思えば、内向的な怒りを現実に向けて発動したのは、生まれて初めてだったと思う。

やると決めたからには、どうしてもやりたかった。実行まで3年もかかったが、仲間を得て、協力を得て、いろんな物を得て帰ってくる事ができた。

遠征を終えてみて、隊員を見てみると、僕をふくめ、みんなこの3年の間はいずれ回った事で、将来へつながら何かを得ることができた。それは、自信であったり、人生観であったり、具体的な興味の対象だったりする。学生の間だけのものでは決してない。「これから」の未来への希望だ。

まだ、僕の反抗期は終わらない。終わらせたくない。老人になっても怒りと、この合宿で得たものをもって、走り続けていたい。タクラマカン遠征は終わった。けれど、これは入口だ。これからもっともっと戦い続けようと思う。

最後に、こんな反抗的で我儘な僕を理解し、協力していただいた、多くの方々にお礼申し上げます。この

ような恩を受けたおかげで、はじめて社会全体に対する大きな愛と信頼が生まれました。本当にありがとうございます。



黙々と歩く（野口）

雑感

23代OB 松原 保

ヘディンの探検から100年目の年に・・・

95年初頭、阪神大震災を見て、私の血は大いに沸き立った。何かしなければならぬ！地震発生から4日後に支援物資を運んだが、それも私にはあくまで一過性の出来事ではなかった。あのテレビで見た画面で沸き立った血は、徐々に冷めたもの、くすぶりつづけていたのだろう。今回の遠征参加も学生たちの熱意に多少持ち合わせていた義侠心がうずいたこともあるが、それ以上に私の中に宿っていた探検魂の火種が燃えてしまったのだ。

当初は学生たちの計画はいまだ、彼らの実力から見て1年延期して、もっと十分な体制で行くことが彼らのためになるだろうと考えている一人であった。

しかし、学生にとっても既に2年の月日を費やして、計画の準備にあたってきた。さらに1年の延期は、彼らの今後の人生にも大いに関わってくる。とすれば、どうしたら良いのか？そう悩んだとき私の腹は決まった。私も一緒に行こうと！

帰った後、今までの仕事をしていくにしても、自分の趣味・個性をもっと鮮明にしなければならない。そこから、もう一度弾けてみたい、そこから何か生まれるかもしれないと漠然とした気持ちと勢いで、参加を表明したのが本音である。95年の春のことであった。

それにしても、何か自分を納得させ、遠征の派遣するタイミングとしても大義名分が欲しかった。それを“ヘディンの探検失敗から、100年目の再挑戦”の年であると多少こじつけぎみで思い込んだ・・・だからこそ95年に行く意義が深いと・・・。

探検バカを目指して

これまでも今まで北米大陸縦断をはじめとし、アフリカ踏査、そして仕事上での海外ロケでたくさんの国を回ってきた経験がある。口だけが達者なOBでなく、行動もできるOB、そんなOBも関大に一人くらいはいてもいいんじゃないか、誰もいなければ自分になるしかない、そんな思いといつも葛藤してきた。

それにもまして、今回は中国大陸をこの目で実際に見てみたかった。しかも遠征地は、昔から憧れていた“シルクロード”。日本人の持つ文化のルーツが宿っている土地なのだ。

実際行動を共にして、一回りも年上の私から見た学生は、やはりいろいろな点で世間を知らないことが多い。そして、なるだけ怒りたくなかったが、度々怒鳴ってしまった。

たぶん、私が指摘したことは社会に出ていない学生にとって、理解しがたいことの方が多かっただろう。いずれ、ここで何を間違ったのか、どこがまずかったのか理解できる時が来るであろう。そう思って、叱り続けた。

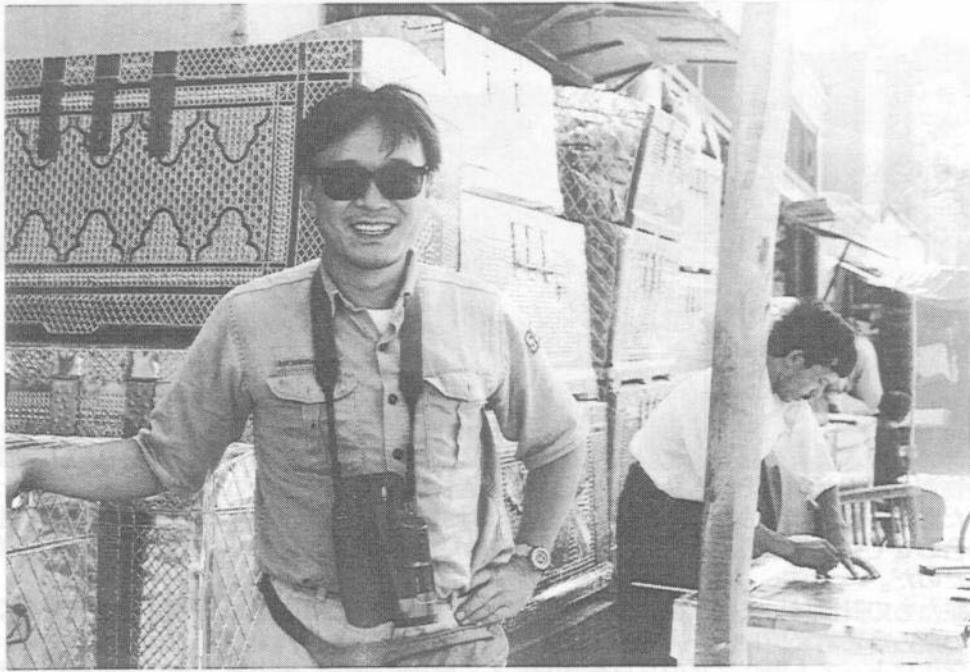
人間年を重ねるにつれて、現状を判断し、先を予測できる能力が養われてくる。それも一つのケースだけでなく、別のケースも想定できる。そういう意味では、学生たちは、経験がまず足りないのは当然のことであろう。

しかしある一面では社会の常識を突き破る破天荒なバカがもっと現れないのか、中途半端なバカでなく、人生を賭ける探検バカは関大探検部からも生まれて欲しい。そんな身勝手な思いを含めて、私自身も己に挑戦したつもりである。

彼らが今回の遠征を通じて、大いに勉強になったのは「人に動いてもらうことの難しさ」であろうと思う。学生だから許せることは確かにあるし、そのことを大いに利用すればいいと思う。

かといって、学生な幼稚な考えで計算し、マスコミを巻き込んでアピールしようなどと考えないで欲しいことを願う。人間、時にはバカなやつのためには動いてくれるが、計算するやつには見返りを求められるということを心に刻んで欲しい。

最後になりましたが、今回の遠征は出会った人たちに支えられて、初めて成果があったものと感謝にたえません。心よりお礼を申し上げます。



カシュガルのバザールにて
(松原)